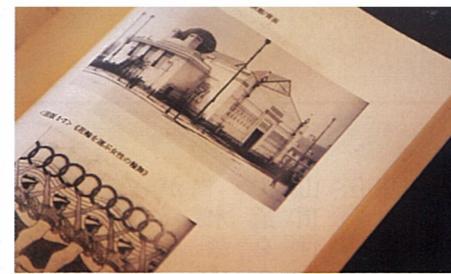




自宅の玄関を入ると、美術館の回廊をイメージした「パルナスインテリアルーム」。  
(大分市中島中央2-3-33 ☎ 097-534-0323(FAXと同じ) \*完全予約制・祝日休み)。  
子どもの頃の部屋の壁紙貼りが、インテリアコーディネートの初仕事だったとか。



修士論文の中の1ページ。「ひとつにまとめる作業は、ゼミで月に1回発表するのとは訳が違う苦しみがあります、でも研究はやりがいがあるものです」

自分でデザインした書棚に、研究テーマの書物がぎっしり。指導教授との出会いも、がんばれた要素として大きかったとも。

## 学生になったお陰で、力のなさを知り、反省できた。

苦手なドイツ語の辞書を読むための必需品は、虫眼鏡。電子辞書も欠かせない。

「セーハ!が会いたかった人」と書かれた赤い文字。

「大分市中島中央2-3-33 ☎ 097-534-0323(FAXと同じ) \*完全予約制・祝日休み)。  
子どもの頃の部屋の壁紙貼りが、インテリアコーディネートの初仕事だったとか。

分厚い修士論文が机の上にどんどん乗っていた。中をべらべらと捲るが、見るだけで頭が痛くなりそう。そもそも、大学院へ行くきっかけは何だったのだろうか。

「7年間、NHK大分文化センターの講師としてインテリアを教えながら、自分自身がインテリアの歴史をもっと勉強したいと思うようになった。どうやって勉強していくのかが分からず、放送大学で勉強した後、大学院で学ぶしかないと思ったんです」と川崎さん。2年前、主婦業と受験生をかかる母親にもかかわらず、大学院を目指すことになった。

「娘が大学の受験勉強をしているときに、私も同時進行で受験勉強してました。一段落して来年とか思っていたら、仕事を中断し、入学式から2年後の1月10日の提出日をめざして、大学院生活に突入した。他の若い同級生と約30年ぶりの学生生活を愉しんだのかと思いつきや、「お茶を飲む暇もなかった。皆、常に研究室にて勉強しているから。修士論文を書きながら、何度も挫折しそうになつた」けれど、同級生がいたからがんばれたという。その年の正月は、「なかつたですね、もう家のことどころじやない」

「セーハ!が会いたかった人」と書かれた赤い文字。

「実践とデスクワークの両方の大しさを早くも実感しているそうだが、修士論文の欠けてる部分をさらに深めて、インテリアコーディネートにも生かしていきたい。それが一生のテーマだ

## 大学や大学院は若い人のためだけにあるんじゃない。

日本に資料が少なく、現地の図書館に調べにも出掛けた。川崎さんが新しく発見したことは?

「いくつかはありますが、まだちつとした立証ができていません。研究といくのかと問うと、提出直後は、「勉強のベの字もしたくない、本も読みたくないかった。でも、仕事を再開して自分の生活が戻つてくると、ここまで何年もがんばつたし、自分の限界があるかもしれないけど、くついてやつていきたい」と、次の目標に向かう気持ちに早くも切り替わっていた。

「例え家具でもカーテンでも、歴史を知っていると、そのものの背景が見える。見えてくるものが広がった気がします」

「実践とデスクワークの両方の大しさを早くも実感しているそうだが、修士論文の欠けてる部分をさらに深めて、インテリアコーディネートにも生かしていきたい。それが一生のテーマだ

### かわさきひろみさん

今年3月、別府大学大学院文学研究科文化財学専攻 修士課程を修了。テーマは「世纪末ワインにおけるコロマン・モーザーの空間デザインについて」。美術史に興味があり、小学生の頃に美術全集を買ったほど。実家が上野(東京)の美術館などに近い環境から、子ども時代から美術館通い。インテリアへの興味が育まれたのも、そんな環境によるものかもしれないという。大学卒業後、東京銀座(株)和光室内用品部に勤務したが、結婚を機に大分へ。インテリアコーディネーター、学芸員の資格を持ち、自宅の一室に「パルナス インテリアルーム」を開いている。東京都出身。

撮影/杜多洋一 取材・文/編集部

## 川崎弘美さん

大学院入学、修士論文を書き終えて、インテリアの仕事を再開。

「大学生の娘が同じ大学の社会人の聴講生の人に、うちの母は大学生なんですと誇らしげに言ったと聞いたので、子どもたちも認めてくれたのかなと、嬉しかったですね。ちなみに、ご主人も、嬉々としているねとの反応だったとか。

の力のなさが分かるんです、だから非常に謙虚な気持ちになります。それは、学生になつたお陰かもしませんね」と笑った。他にも良かったことは?

「若返りましたね(笑)、最初は『なんだこのおばさん』と見られたはず。でも、勉強の話は同じようにできるわけね、20代の人たちと。同じ学生として学ぶうちに非常にフレッシュな気持ちになれた。みんなすごく勉強もするし。しかも、年を取ると注意してくれる人もいなくなるでしょう。反省して直そうと思う気持ちになるなんて、学生にならなきやもうない、非常にありがたかった」

それを50歳になった今できただことが、とても贅沢なことだと感じたという。「大学や大学院は、若い人のためのものじゃないんです。遊びたいと思ったら、中途半端なことをしないで、飛び込んでしまうのがいい。生涯学んでゆくってこられる。見えてくるとと思います」ときっぱり。

「だって、仕事は楽しいでしょ!」

あれもこれもと、欲張りなんですよ、自己分析した川崎さん。でも、取材中と逆に質問されてしまった。

「大分市中島中央2-3-33 ☎ 097-534-0323(FAXと同じ) \*完全予約制・祝日休み)。  
子どもの頃の部屋の壁紙貼りが、インテリアコーディネートの初仕事だった。